小不忍则乱大谋（小を耐え忍ばないと、大謀を乱す）

であるから、

车到山前必有路,船到桥头自然直（車は山に近づけば必ず路が現われ、船は橋脚に近づけば自ずとまっすぐに進む）

と信じて落胆せず、

退一步天高地阔（一歩退けば天高く地闊し）

になれると楽観視することを会得してきたのである。

中国人の特性の一つとしてしばしば指摘されるのは、中国人の忍従性であるが、中国の諺に“忍”あるいは“忍耐”に関するものには、上に挙げた“小不忍则乱大谋”のほかに、

忍一日之气,免百日之忧（一日の怒りを忍んで、百日の憂いをまぬかれる）
忍字心头一把刀（忍ぶという字は、心の上に刃という字）
不受苦中苦,难为人上人（苦中の苦に耐えなければ、人の上に立つ人になれない）
不受苦中苦,难得甜中甜（苦中の苦に耐えなければ、甘中の甘は得られない）

のようなものもある。すなわち、厳しい自然環境とつらい社会の中で生存していくためには、“忍耐”が必要とされる。しかし、こういう忍耐は受身の忍耐ではなく、忍耐の中に“车到山前必有路,船到桥头自然直”とか“退一步天高地阔”とかいうように、期待、希望などが込められており、粘り強く生を追求する精神に支えられた主動的な忍耐である。

中国人が何故に忍従性、粘り強さを有するのかについては、それを自然環境と歴史的な背景に求めることができる。

中国は領土が広く、各地域の気候条件も一様ではない。海岸線は東側にしかなく、国土全体に比べると、沿岸の面積はきわめて小さく、海洋の影響はほとんどない。中国の南方は日本と類似した気候状況であるが、中国の北方地域とくに内陸地域は、これとは違って大陸性気候である。北方地域の気候条件は日本よりかなり厳しいと言っても過言ではない。大陸性気候のために寒暖の差が激しいし、雨量も少ない。住民は常に旱魃に苦しんできたが、長江、黄河のような大河があるので、時には洪水に見舞われ、家や田畑を失う目にあう。黄河の氾濫と治水は歴史的事実として多くの記録を残してきた。中国の歴史は夏の禹王の治水から始まったと伝えられ、「大禹治水」という言葉は今でも一般に知られている。中国文明は中国北方の黄河流域から発生し、そこから次第に南の方へ拡散し浸透していったため、中国人のあらゆる観念は中国北方の黄河文明がベースとなっている。中国人は劣悪な自然の中で鍛えられ、絶えず人間の生存の場を求めてきた。

呉主恵（1989）によると、「自然環境は自然的事実を生みだし、同時に人間に教える。自然的事実の中に自然的脅威の存在が一つの内容をなしている」[14]のであるが、中国の歴史はある意味において、「漢民族を中心とする中国人の自然的事実に対して、挑戦し、かつ順応していく記録であったといえる」。[15]自然の脅威は、洪水、旱害、蝗害などが挙げられるが、これらの脅威の多くは農業生産と関係し、生存に関わるものである。このような自然の脅威は、農民に不可抗力的だと思わせ、宿命的な意識を与え、さらに生への執着という意識によって強く支配され、それによって、自然に抗しつつ、「自然に対する順応性も知り、宿命に対する調和性を覚え、知らず知らずのうちに、そこから忍従性を習得するにいたった」[16]のである。

歴史的環境については、歴史上幾多の王朝の栄枯盛衰は中国人の精神的特性の形成にも大きな影響を与えてきた。歴代王朝の栄枯盛衰に伴う社会の動乱の中で生存していくためには、中国人に忍従が求められた。しかし、この忍従はやはり単に受動的なものではなく、常に期待、希望をもちながら、生を追求する主動性のある忍従である。

また、

知足者常乐（足るを知る者は常に楽あり）
知足常足,终身不辱（足るを知れば、辱しめられず）

などのようなものも存在している。これらの諺から中国人特有の考え方が窺えるが、それは中国人の特性としてしばしば指摘される「楽天性」と「知足思想」である。

知足思想は、宿命観から派生したものであるが、これは老子の無欲思想に遡ることができる。老子の《道徳経》に現われた“知足不辱、知止不怠”および“莫大于不知足、咎莫大于欲得、故知足之足常足矣”がそれである。上に挙例した“知足常足,终身不辱”は、老子のこの《道徳経》が出所である。知足思想